

比木神社



【創建について】

第13代 成務天皇(西暦131~191年)の時代に創建されたと伝えられている事から、1800年以上の歴史を持つとされる古社と推定される。明治元年神仏分離令により寺号(長照寺号)が廃せられ、明治2年比木神社と改称、明治5年郷社に列せられる。現在の社殿は明治十年の火災の後に造営されたもの。



【祭神について】

祭神は大己貴命(おおなむちのみこと)で大国主神(主おおくにぬしのかみ)の別名である。現代においては、大国主命(おおくにぬしのみこと)とされるが「古事記」「日本書紀」における表記は大国主神とされる。

そのほか大己貴命の妻、三穗津姫命(みほつひめ)、その子である事代主神(ことしろぬしのかみ)と建速須佐之男命(たけはやすさのをのみこと)、櫛名田比売(くしなだひめ)を含めた五大明神とされる。百済王族の福智王が没後合祀され現在は六柱の祭神となる。

【百済王族の福智王について】

天平勝宝8年ごろ(西暦756年)百済で内乱があり、逃れてきた2艘の船が広島に着きその後追っ手を逃れ筑紫(福岡)に向かったが、嵐にあい1艘は日向の金ヶ浜、もう1層は高鍋の蚊口浦に漂着した。日向に着いたのが父の禎嘉王で高鍋に着いたのが子の福智王であった。

福智王は占いにより「火棄(ひき)」に住むところを定めた。本国からの追っ手との戦いで父禎嘉王、弟華智王が戦死をしたが、福智王はその後住民との交流をしながら火棄で一生を過ごし「火棄大明神」として合祀された。その後仁寿2年(西暦852年)に火棄の地名は火災を連想するので比木と改められたとされている。



【秋月藩と比木神社、高鍋神楽について】

比木神社は高鍋藩主秋月家の氏神として代々の藩主にあがめられた。特に公息女重病の折、比木神社に祈願したことで平癒したことを受け、比木神社に伝わる神楽を報恩感謝の神楽(高鍋神楽)として奉納したことが始まりとなって「六社連合大神事」(高鍋藩の郷社、比木神社、高鍋町八坂神社、愛宕神社、川南町白鬚神社、平田(へいだ)神社、新富町三納代八幡神社)が行われるようになり現在も続いている。

【秋月藩について】

鎌倉時代より九州内の平家の家人であったが、源平合戦で源氏方に与し鎌倉幕府の鎮西御家人となる。以来、現在の朝倉市あたりを治めていたが、1587年豊臣秀吉の九州征伐で戦いの末降伏し、日向国高鍋に移封された。

江戸時代となり慶長9年(西暦1604年)居城を財部城(のち高鍋城)に移し、高鍋藩(現在の高鍋町・川南町・木城町・都農町・日向市の美々津・串間市・宮崎市の瓜生野・倉岡・木脇を領有)が成立した。福岡藩は高鍋藩を支藩として維持し続けようとしたが、初代藩主となる黒田長興が三代将軍徳川家光に拝謁し、8年後の寛永11年(西暦1634年)、5万石の朱印状を賜り、独立藩として明治維新まで12代続いた。



【福智王の親族と現代に伝わる祭事】

禎嘉王:福智王の父。百済からの追っ手との戦いに敗れた。没後、美郷町神門神社に「神門大明神」として祀られており、毎年1月に福智王が禎嘉王を訪れる「神門御神幸祭(師走まつり)」が行われている。

之伎野(しぎの):禎嘉王の妻、福智王の母。現在の高鍋町持田の大年神社に「大年大明神」として祀られている。毎年11月4日に「大年下り御神幸祭」という比木神社と往復する祭事が行われる。付近は現在、地区名を嶋野(しぎの)と呼ばれ嶋野浜がある。